

溪棲



No. 12 SEPT. 1960

溪 稜

No.12

辻 藏 書

今迄に登つて山を想ひ起すと、すぐ藥師岳
來鞍岳といふ風な山々が中心となつて形作
る山脈の大きな形像が、殆んど藝術的とい
はれ得るほどの壯麗な姿を以つて、想像の
内にありありと現はれる。

さうしてちのが、詩に於ても絵画に於て
も表現することが出来ないほどに独特で
あり、又藝術の題材として不適当である
とすれば、それ等の姿こそ藝術以上の藝術
として見らるべきであろう。

—— 田部重治 ——

涙穂 N.12 目次

▶ 卷頭言 ◀ — 35年度を迎えて —	柿沼 博 (3)
▶ 谷川臨面集中 ◀	
▶ 鷹ノ巣A沢	中川隆史 (4)
▶ 鷹ノ巣B沢	長井宏子 (5)
▶ 国体報告 ◀ 雲取山 —	辻勝四郎 (6)
▶ 臨想 ◀ 山の開ける事についての一考察 —	山県昌彦 (8)
▶ 山行報告 ◀	
▶ 金峰→国師岳縦走	筒井満栄 (10)
▶ 雲取山 — 県体報告 —	小林敏子 (13)
▶ 春の立山	山県昌彦・満栄 (15)
▶ 臨想 — 僕の登山用具 —	辻勝四郎 (16)
▶ 春期谷川臨合宿 ◀	
概要・行動記録	(20)
▶ 一・倉一・沢・東尾根	山県満栄 (22)
▶ 息帽子沢奥壁変型チムニールト	辻勝四郎 (23)
▶ 一・倉沢ヨレンゼ	篠原健二 (24)
▶ 冬期南アルプス合宿 ◀	
概要	(30)
▶ 行動記録	斎藤良則 (31)
日程表	(32)
共同装備・食料品表	(33)
▶ 駒ヶ岳紀行	柿沼 博 (34)
▶ 仙丈岳紀行	菅野達也 (35)
▶ 共同合宿反省	辻勝四郎 (36)
▶ 会務報告	
山詣会の記録	(37)
会計報告	(38)
▶ 編集後記	(40)

△卷頭言△

三十五年度を迎えて

柿沼

博

方々は、この閑門を突破して、その後ますます立派な山行とされて活動して居られることは誠にばしく、後悔り現れる二とを期待したい。

種々の生活経験を通して個人の成長があると同じように、山岳会にも成長がある。そして会のエネルギーの源は、会に属する一人一人の中にあるのだから、会員の一人一人が若々しい、発うつとした活動意欲を持つことによって、会はいつも活潑す、成長を続けることと思う。

山登りをする人々が、本当に山登りをいつまでも継ぎ行くのに三つの閑門があるといわれてゐる。そのオニは就職して勤めに追われ、時間的に余裕がなくなり、休時、オニは結婚して家庭を持つに際、オニは金の地位が出来に際、とのことである。我が会の中にはオニの閑門に遭遇して、躊躇した人は残念ながらまだ居られぬようである。オニの閑門については、昨年度、我が会においてはじめて三ヶ月で至るところ才ぐうだ、それ

オニの閑門については、我が会に於いて多少問題があるようだ。若い者が会も会員の大半分がこの閑門を通過し、或いはさしかかっている。これらの方々の中には社会的条件、或いは個人的・環境等によつてあまり数多くは山行に実動出来ない人もいるでしょう。しかし本当に山が好きの人ならば心かけて山の本を読んだり山の仲間と研究し合つたりして、いつも山の方に向いて、山と相対している事は出来ると思う。そのようなないつも山に向つている態度がてとえ山行回数は少くとも一ヶ月の山行と立派なより良きものに高めていく内面的貢献となるものと思う。一人くいろいろな条件によつて閑門があるでしょうが今年も互に手を取り合つて調子の高いよき登山へと向けて行きたいと思う。

谷川岳

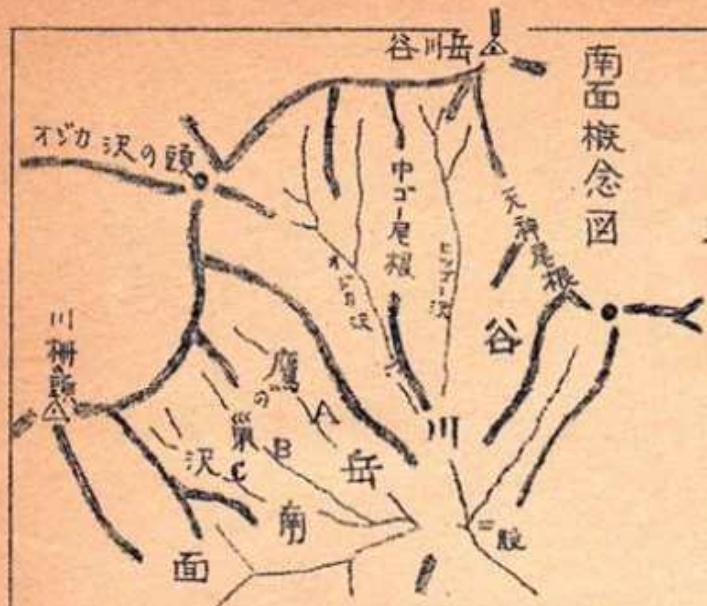
南面鷹の巣沢集中

期日 八月二十一日

M
e
m

A 沢	中川	村田	山崎	菅野
B 沢	山縣	吉田	齊藤	小林
C 沢				
柿沼				
長井				
近藤				
岩井				
筒井				

南面概念図



△鷹の巣△ 沢△ 中川隆史

寒い!!。二時半ねぼりまなこをこす
りつつ水上駅に降りると先發隊が皆寒
さうにマットの上でふるえている。

は美しい。續く干らも右岸ミトラバー
ス。こゝ辺りは左岸は幕岩に續く峭壁
門山が、右岸は木レルドは細いが堅く
乾いていたのでビアラムがよく生き残
持がよい。

泉へ、真夜中の河の音をぼんやりと聞きながら四時三十立分ニ股に着く。ここでオカンジが何の用意もほい僕にはとてもねむれない。一時間もすうと目が覚める。間もなく全員起きて夜サスツカリ明けに二ろ簡単な食事をすませ七時二十分出發する。約十分でA沢の出合、A沢は朝日に輝き、不気味にひかっている。

十時過ぎガルジニは終りニ股につく
ニ股よりは右股の小遠を数段越え中間
リツナミトラバースして左股に入る。
すぐヒヤンと氣を遣たなるが、落ち口
が一枚岩なので思つてより悪い。や
がて草付となり、最後のバットレスと
浮石に注意しながら木の根草り根を被
りに悪戦苦闘り末、十二時半積縫にて
び出す。

B・C沢隊と別れ一時間も過れにゴ
ーロに行くとわすかに水を流れゴル
ジューの入口に着く。すぐ下1・手々
ニー 扱う所を乗り越す。F2・F3い
ずれもこまかいホールドに注意し右が
う右岸をトラバース。F4はチヨツク
ストンを持つに適でバツアンドニイ
ギ越す。この辺はA沢の核心部である。
續くF5・水量は少すいがスラブの滝

緊張感より解放され昼食。食事が終る頃も沢隊も到着。しばらくの間谷川水上の町の一望される所で陽に当りながらB沢隊を待つ。オジカ沢り頭でB沢隊と合流。二時半ひろかる雨雲に追われるようなくちば中ゴ一尾根を下る。七時半、思つにより時間がかかり谷川部落に着く。

△△ 壱の巣 B 沢△△—長井宏子—

棱線と不シカ沢の頭へ向つに。

B.C 沢分歧先に着く。一同フラン
にはきかえザイルとつけた。左の広
いスラブを登る C 沢パートティと別れ
右側の狭く急峻且 B 沢に入る。ナム
ニー状の F 1 の右側を登り、F 2、
F 3 と右側を高捲くようにして越す。

さ程の恐怖感をもく F 6 の上のス
ラブに虫K。ここで昼食をとる。お
天氣は上々、広々としにスラブが続
く。足下が広くあまり高度感はない
が、一步踏みはずすと下方まで滑り
落ちそうに見える。陰うつな感じの
冴い明るい沢である。F 14 の二段の
滝を越えやがて、岩や灌木を頼りに
急斜面をのぼる。トツブのよきルート
トライインディングのおかげで、まも
なく跡のある所へ出る。ひと汗か
いたところでガスのかかづに稜線に
たどりついた。わうじ五報にはさか
え北アルプスを思わせる様な想品の

コースタイム

A 沢：水上巣(三・一五) ↓ 二股(四・三五)

ニ股(七・二〇) ↓ A 沢出合(九・一〇)

↓ 滞在(十一・一〇) ↓ オシカ沢の頭

(十四・一〇) ↓ 中ゴー星根分歧(十四・一〇)

谷川部道(十六・三〇)

B 沢 B.C 沢分歧(八・十五) ↓ F 6 上のス

ラブ(九・二〇) ↓ 船場の稜線(十一・九〇)
↓ オシカ沢の頭(十二・三〇)

以下 A 沢隊・C 沢隊と合流



雲取山

埼玉県メンバー……監督柳下明夫以下
選手4名
期日……10月25日～10月29日

◇国体報告◇

辻 勝四郎

日原より雲取へ

第一回(十月二十五日)

神宮外苑での草やかな開会式が終る
と、田谷小学校から何台かのバスに分
乗して夜道の甲州街道と水川に向う。
九時過ぎ提灯を手にした町民の歓迎
の中と水川駅前に到着、いくつかの指
示を受けた後町中の指定された宿舎に
分散する。

次二日(十月二十六日)

日原→唐松林道→アナ坂→雲取ロツ
チ(①)

寝不足と同邪引きで頭の痛い朝であ
る。中学生の持つアラカーデをえ頭に
胸会さ場の水川小学校に臨む。花火の
音が周囲の山々にこだまする。

型通りの胸会は、大会役員の挨拶、
元の歓迎の辞、ついでに「払い詰え
清め詰え」とお払いも出る。その後中
で台風災害で国体参加を見合せに延期

三乗の代表役員が壇上に立って詩には
さすがに惜しがれの拍手が起つた。
開会式が終ると、アラスバンドは送

られて次々と並発。僕達B隊はA隊と
共に聖前からバスに揃うれて日原に向
う。小川谷出合でバスを降りる。ここ
で長沢育穂に向うA隊を見送り、日原
川に沿つて歩き始める。何時も間隔か
霧の様な雨が落ちている。

広い自動車道が果てると、ハタゴヤ
坂の急登りが続いてやがて怪はぬ峠
を捲く様になる。金中警林署の掛小屋
に入って中食、角び日原川に下つて唐
松橋を渡ると、いよいよ唐松林道(舊田
新道)の急登りジグザグの登りである。県

体登山の時は台風り被害でひどく荒れ
ていた径も、今は大部改修されている。
そう言えば雲取仙人島田治三郎翁も今
はない、癖のある人にも思えに、果
ての時挨拶しに夕が船を見た最後だった

。

霧が流れ今まで頬をすりて、足元では
は力すコソと落葉が鳴る。時折、清澄
な空氣と美しい靴に踏みしおかれて木
ヤンボキンと折れる長い竹林の音、
まぎれも無い秋又り林である。

途中休憩二回、浅黄に紅葉した若葉松の林を抜ければ、雲取下峰く七ツ石のタリミに出る。田舎半今日の泊り所新設の雲取ロッヂに入る。

才三日(十月二十七日)

船尾山→将監峠→笠取山

薄明に小屋を出る。埼玉が隊の先頭。空取り山頂、風が強い、雲が立つて展望もきかない。とんでも廻りの山々を、地元の奥多摩山岳会員が「見えぬ山にりが鳩、鶴高」をやり出す。縱走路を行く。睡むくなる梯は歩行、途中で笠取小屋から逆コース未だに隊とすれちがう。遠望する将監峠用立り落葉松が、全山陽に映えてあじやかだ。

才四日(十月二十八日)
笠取小屋より丹波へ
笠取小屋→一之瀬→一之瀬林道→円波八谷→川野(宿)

下りは早い。次治いろはやもう太郎傾斜がゆるくほつく木た。紅葉はこの間に笠取小屋に到着。今日は小屋の横に全員奉公である。社説前、小屋の前に大きな焚火玉下いで夫婦会が開かれる。他界の連中が一様に芸達者なりに賛ろく、我々は仕方が打ひのでうう覺えの秋父音喫を歌った。

甘茶と甘酒と勘定いしに僕は、甘茶を飲み所がうつ甘茶日本に出ていたか因とさって美い草になつた。ここでA隊と会流、一足生に大口峠に登る。峠三越えうともう自動車の通う様な広い道跡である。長い平坦な道は多摩川沿に走り、奥多摩湖末端の丹波からはバスでそれぞれ湖畔の宿舎に分散。我々は将監館の旅館に散らねぐ。

やれく御苦勞様とスし振りに新聞を読み、日呂に入る。夕方、バスで五分程の所で歓迎の「湖畔の夕」が催され、愉快行くろい下夜を送つた。

才五日(十月二十九日)

バスで奥多摩湖に出て見学する。こかう再びバスに乗り水川の一中平前で下車して街頭行進に移る。

水川小学校講堂で開会式・松方三

郎氏等御歴々う挨拶、講評があつて次いで地元の好意による送別会に移る。事前に飲まないで待ち帰つてくれと言われた酒にも、目下前にある

と皆ついい手が出てしまう。我々うぐりと地元の人々が奥多摩音頭で踊り出す。我々も見様見真似で輪に入る。

「スドニかの山で会いましょう。」

そんな事を言つては、握手と求める肩と向にき合いながら、さわやかに秋の昼下りのひすりに講堂の隈々にまで行きわたり、善意の酒の中でもみじみとしに幸福感にひたるの如く。

山の開けることについての一考察

山県彦

日

彦



ゆけで、北アは例に出すまでもなく、谷川岳でも清水トンネルができる迄は我々労働者が日帰りできる山ではなかつたし、近い秋又、奥多摩あたりでも交通の便が良くなつて日帰りできるようになりコースが増えてゆけて、その中では私自身も「山を開けに」との恩恵に隨分うつっているつもりである。

山小屋についても同様、大抵は天幕を張いて歩く私たが、少し放張、火單獨行とか積雪期には結構山小屋の厄介になりつてゐる。

結局問題は山を開ける程度と、登山者と登山に対する考え方であろう。ここに全面的に反対するものではなく、交通の便が良くなつたからこそ時間的余裕り余りない私たどでも今のように山へ入ることができるようにはづくに思えて戸惑はせざると得ないのだ。そうは言うものの、私は山を開けることに全面的に反対するものではない。登山という行為を單なるリクリエーションと見る限り、山は開ける程良いことにはろう、リクリエーションとは晴らし、休養である。美しい大自然、

に接し、山頂からの景観をほしいま
まにしたい。然しそのための労力は
なるべく少く、できることならバス
でもケーブルでもそれらの施設が自
然の美観を損ぬ程度において、我
が身を山頂に運んでくれるし、山頂
の小屋は万事設備が整つて快適な生
活が送れるというのが理想であろう
。こも大いに結構である。

一方登山には所謂アルピニズム互
基盤とするスポーツとして的一面が
ある。「登山の本筋は頂をきわめる
ことにある」では有り、山における
困難といふによく斗つてかにある」
というかのマムメリーの言葉はこの
一面をよく言い表わしている。困難
は岩壁に挑む、谷を溯行し、或は雪
深き山に入る登山家達。彼等にどっ
かりと諭高山植物は美しいし、山頂
よりの景観は素晴らしいには違ひな
い、恐れ彼等を止に引きつけるのは
そういう美しさよりもむしろ登山の
苦しみ、もっと正確に言えばそぞ苦

しほとの斗い、そして斗い勝つた喜び
である。この喜びなくしては山の美し
さも半減しようというつもりである。

それなりバスには乗らず、よく踏ま
れ石尾根跡は避け、岩壁や沢やヤブの
中にルートをとり、小屋も使わず、い
つも天幕と背負って歩けば良いでは有
いか、ということになる。こも一理
はあり、私も或程度までは実行してい
る。然し、いくら山の気分に浸りなが
らでも、にぎくしい登山者そのせに
バスの埃とあびせられてテクテクは困
口だし、折角展望を良い徑があるのに
わざく敷と滑ぐるも絶狂する。次
歩さにしても頭上に立派な桟道がで
きてしまえば何とか馬鹿々々しくなる
し、或は又キスリングの重荷に喘ぎな
がら一步くづむるわざと、サアザック
り連中に軽々と追いついて行かれたり
すると、つい巔にさわるの世人情であ
う。

そういう幻滅というか悲哀というか
そういうものと避けたのに残され

た手は、人に知ら少ない山に行くか或
いは所謂シーズンオフをねううしか存
ない。然しこう狭い日本でP.R.これでい
てはいけないし、シーズンオフと言つて
も殆んど一年中シーズンのように有様
で、まあ冬期、それもスキーヤー連の
来ない山に限られよう。それに私など
には時間的、経済的万難が加わって
くる。

さて、登山のこういふに現状は社会
的に大きな危険をもたらしている。

一つは困難の増加である。登頂とい
うことだけから見れば最近は困難とい
うものは急速に駆逐され、多くの人が
困難の過程を知らずに登頂の喜びを味
わい、それが登山のすべてだと錯覚を
する。そして当然に過程として本筋の
なスリルへと興味からすう無謀な真似
事。困ったことに山は常に万人に解放
されている。いくう山が開けても天候
の変化を防ぐことはできず、重力の法
則は変えられないという事と認識し方

金峯一國師岳走

栄井満筒



期日 11月21~23日

M. M. 植沼博

山樂昌考、辻勝四郎

高井満栄

い人々、登山にはルールがあつてそれを知らぬ人達は死を以つてそれうゑ知らざるるうだ。山が開けた時に山と山の間で混同混亂が最近う遭受増加の一因ではなかろうか。

一方、登山者の増加に反し、山の高みに立ることに悪く上り幸福を感じる感情を以つて山を更に眞の登山次第は減つてくるのではないだろうか。若い人々は殆んどハシカタよううに一様に山に出かけ、山が好きだ

と言ふ、然らず校正卒業し社会に入る者とケロリと山と縁を切り、せいぜい安易身ハイカーかケレンデスキーヤーに変つてしまつうのが大部分である。勿論体力や問題やらそり他種々の事情はある。然し何も激しい岩登りを繰ける

といふ意味ではなく、赤裸々な自己の力を盡して山々と相討したり感情、その美しさに打られ、偉大なる驚嘆しにあり當時は骨身にしみこむ軍令をとつて動けなくするに、何うかの形で意欲的登山行をせずにはおかないも

のだとと思うのだが。山を開けたことが、山に入りて山を感じる登山者を作り結果になつてはいかなかろうか。

山は單なる競争の場では無い。現在のアームが運動具屋、簡易旅館の山小屋の經營者、交通関係の商業資本家、

或は登山関係の出版社を喜ばせただけで、山の崇高さが次第に失われ、真う登山が忘れられてゆく、狂怒を防ぐべく我を山に愛する者は眞剣に考えねばならないと思うのである。

ヘオ一日▼ 雨後晴

あたふたと駆けつけた土胚の午后、新宿駅、連休と並んで夜行の混雜と散遠してはんぱな時間の列車にしたもの、不一ムは行列の人で一杯、それでもわざく見送りに来て下さつに長井さん

の応援もあつて何とか私達女性は腰掛けられたのは有難い。

途中から降り出た雨は暮の立崎駅に降りても止まず、通勤帰りと登山者を超満員に押し込んだバスは私達を盛川まで運んだ。こゝバスは此處止まりなのだが、登山者達が立って増富まで行つてもうえきことになり一安心。雨もいつしかすっかり上り、空一面に散りばらまかれ、ようやく星が輝いている。

木曽川沿いの中広い跡を屋をかづ
のほがら歩く。約一時間程で左折し
樹林帯を抜け出ると金山の草木があ
る。前方には瑞牆山から金峯に譲く
稜線が黒々としてシルエットで空空
に浮かび上っている。汗はんで肌に
冷々として夜景が心地良い。

金山の狂のパンガローと借りりうこ
とにする。テントや山小屋、或はオ
カントリーニーは珍らしげで、街から昇つ
て未だ下弦の月を窓から賞でながら
御満悦の態で眠りについた。

(三・二五) — 金山(三・二三)

ヘオ二日 ヴ 快晴

雲一つない紫色の夜明けの空は、
次第に明るい青色に変り、薄白い月
と中天に渡しにまた夜は明けた。六
時出発。霜を踏んで金山峯を越え、
美しい白樺の林を歩ひとと、最近本來
らしい瑞牆山荘の前へ出る。これ

より富士見平まで一時間程で登りが、
まだ朝氣の身体に一寸もたまらるが、左
手に現われる瑞牆山の岩峰が、疲倦を
忘れさせてくれる。

大体今回分計画は女子一人達が秋に
秋父へ行きたいと云つてゐたのが、い
るいり都合で松達三人だけになり、

それではと男の方達の都合のつく方

に同行していよいよところ、男性倒

がぞうくにうめこべーが揃つてしま
つたりで、松達が弱き女性達にとつて
けどうちうこやうの内にビクとも
のびつかず。しかしやさしさ、男性は

どうとかベースだけは松達に含ませて
下さい。トコロは有難い。(申し訳りあり
ません) 富士見平から又一時間程で入

日小屋へ出る。小屋に泊った。バーで1

もあるらしい。小休止の後出発、登り
は今度にくうべてきつくなり樹林帯の
中をぐんぐん登る。大日若も近く守
た喰、Y氏はカメラを入日小屋前へお
いて来た時に気付き苦勞補にも取り
に下る。私達はその間大日若で日向木

ソコとし月がう新宿とかぶつたハケ岳
の眺めを樂しんだ。まもなくY氏自慢
のカメラを片手に現われた。K氏が寒
暖計で气温を測り皆に当てさせたが、
皆プラスの温度をいうと、ほんと零下
五度、尺も殆んどなく陽が当つていう
ので体温過度が高いのであろう。

やがて樹林帯を抜け、新雪の積つた
稜線にさとうとこすがに風は冷い、然し
何と悪天候だうか、昨日の雨
は山では雪と化つて、稜線一帯は美し
く白一色で覆われ、道不も雪で白く輝
きる無川の谷間に南アルプスの山

々が鳳凰から遠く遙り、荒川岳までく
つきりと望まれ左方には雲海の上ド真
白な富士山がその秀峰を現めている
。新雪で杣わ木に岩の尾根を辿ればや
がて頂上に五大石に着く。鳳凰の地蔵
岩には及ばないが、直くかうもそれと
ゆかる巨大な岩である。ニ角奥ほどの
近くの岩塊の間にあり、そこが風をよ
けて昼食をとる。

朝日岳へは平坦な尾根で鉄山は付かぬうちに過ぎ、クリスマスツリ

卷之三

未明、御来迎を見ようと、國師山頂

出しき見えり。

へ登る、少し早すぎて寒風に曝きれて
待つ、日が出が待ち遠しい、やがて雲
海の彼方から黄金色の光がほくほくして

延々と續く单调なトロソコ道は荒川
から離れ、のどかな草原と続い、琴川
に沿つて柳平を経て松口まで続いてい

一のようく雪をつけに樅の林を抜け
れば川端下から蹄と交叉する峠へ
出る。これからひと登りして少し下
れば天狗の小屋であるが、このあく
りかう急に倒木が多くなり蹄ひだり
ぐぐつたりでかなり消耗する。

この夏の台風で天井ひびこんだら、
小屋には、運休のせいか番人が入
つていじ。まだ他のバー等は殆ど
到着していなかつてが私達が夕食を
終つた頃から讀々と詩のかけ述には
土間まで満員になつてしまつて。三
年前までは今頃は一般登山者に比
てはシーデンオフであるのにと
自分もその一片かも知れないが、登山
チームというよりに今更ながら感心
する。

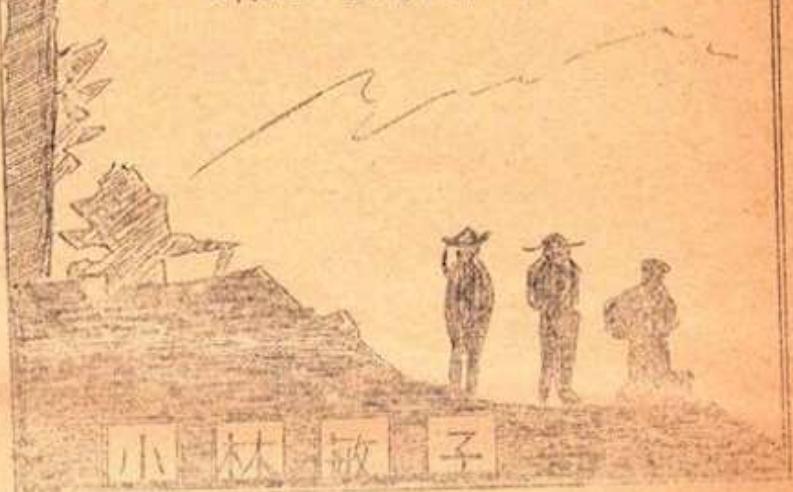
おひで白く掠く　その壯嚴さはいつま
ながう私の筆には表めしきれぬ。私
達は東さむ忘れて立ちつくしていふ。
倒木の下めに通行不許の石楠花新道
を跡めて、杣口へ下ることにする。小
屋の裏から急降すべば間もなく屏仙峠
へと續く荒川の源流に出る。やはり台
風のためか氣水た河原を通り、黒人の
桜沢小屋を経て川沿いの軌道の傍を歩
く。向うに南アの白い山々が山々とか
くれしていくうか目と樂しませてはく
れるが、一ロツコ怪といふのは何ぞで
もいやなものだ。枕木の間に丁度合
う歩中の人に「どう樂しいかしら」と
と考えながら歩まんして歩く。詩々振
り返ると金平の五丈石が後藤からとび

松口からバスで奥山へ、帰りの列車
のチケットを予想し、わざ／＼甲府まで戻
って甲府始発の列車に乗ろうとしたのに
だが、これが大変な長めようじにの
／＼新宿まで立ち通しだったのは、御
老体運の思ひの誤算だったらしい。

大弛小屋（五・三〇）—国師岳（六・一〇）—大馳小屋（八・三〇竿）—桔次小屋（九・三〇）—柳原（一三・一〇）—杣口（一四・二〇着）

一県一体山雲取

期日 10月11.12日
Mem 辻勝四郎・小林敏子



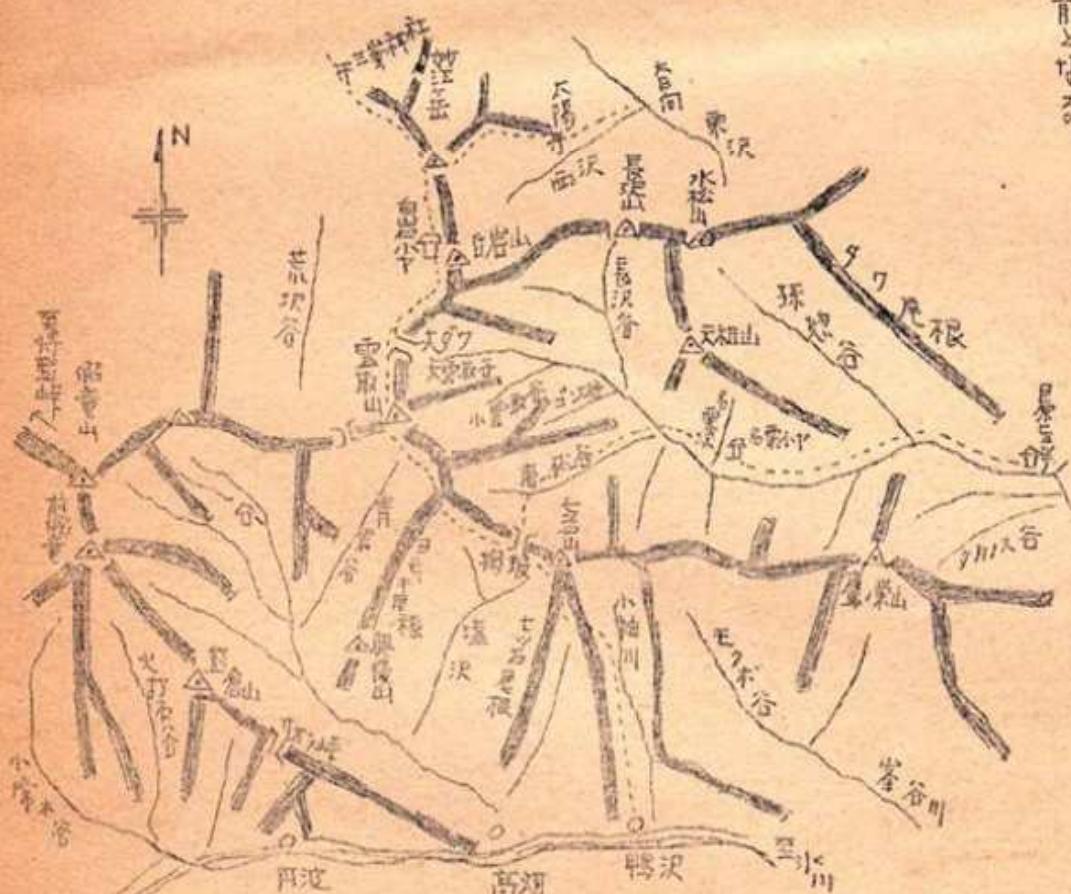
長井さんに見送られて大宮を出発
越谷で乗りかえると浦和市高の山岳
部員と一緒になる。一時三峯橋、バ
スで大輪まで、三峯神橋を渡ると、
まもなくケーブルカートの駅につく。
大変な混雑りで、の人びりと歩き
始める。森林の中を徐々に高度をあ
げていけば、さえずる小鳥の声も遠

くまで静かである。しかし二
の辻一帯は、台風で以前木が
ひどく、路が不明瞭で人足も
アリケル。三時二十分やつ
と宿坊に着く。早々に寝付を
すませ、空に入る。六時から
宿坊の中庭でマーケットか
ニサ、前夜祭が始められに。
秩父岳界に下る秩父音頭、名
岳連によるかくし曲、途中で
国体選手の詠嘆、拍手ともっ
て選手と声こぼれ。火は早く燃
え、ほごやかぼうりとア河前
夜祭は終つた。

午前九時三十分、神社前に各コース
別に集合。リーダー、班長の紹介後大
会長の挨拶、副会長の挨拶、選手代
表の宣誓書があり、神主さんべにまぐし
りがタレし猛まゝて、櫛歛峰につく。
ここでAコース隊と別れ、右方に相模倉
山の美しい姿を眺めながら登り降りる。
読みると、秩父宮御念像のある雪原ヶ
峯に達する。ここで五分休憩。さん
ざう初日早く、両神山と長いキレット
の山稜が、登山者の意欲をそそるのに
充分である。やかて筋清草と通じ、前
白岩、奥白岩の登りである。路はいま
までの明るさとは復って、いかにも秋
父らしい赤い樹林の中に登る。前白
岩山を僅か降ると、右手下に小屋が見
えて出していく。延走路をすぐ脇にある
白岩小屋で、仲々きれいである。ここ
で昼食をとる。これからは奥白岩山の

登りとれる。奥白岩からは又降りとなり、早、木ドッケ、大ダオを過ぎ、ゆるく尾根を登りつめて十一時、雲取山頂に着く。標高二千一ハ木の山頂は広く、又天皇も各方面に渡つて広く、秩父の山脈五始のとし、大菩薩の山々と富士の雄姿、遠くハケ岳・南アルプス迄も望むれる。休憩もそろそろに降り始める。防火線を急に降り、ゴンエ尾根、甚助小屋への分岐を過ぎて、掬坂に着く。まことにヨコース隊と別れる。路は終始唐松谷に沿つてつけられ、秩父特有の原生林を味わいつつ、降る一方であるが、雪取谷の路とは違つて倒木が多く、大変荒れでいる。雪取谷を過ぎ、路はひどモ唐松谷沿いに直すさ、右平に孫恩谷が注ぐとまもなく日向名栗木がある。ここからは唐松谷も日奈川と名を改め、流れも一段と早く、水がでも増してくると、やつと下りが終つてほどとんど平らな路となる。もつかる足をひきすり田舎二

○分全員母革に曰袴へ着く。ニコカラ
ニロウバスで水川へ向つた。五時水
川着、大金平野長の挨拶ご立派十分解
散となる。



雲取山周辺概念図

春の立山
山縣昌彦

満栄

視界零。ラッセルに悩まされつつ、他のパーティと一緒にやりようやく雪に埋まれた室堂に着き、雷鳥まで行くのを諦め、ここで一泊する。

四月二日 (快晴)

630	7:30 (晴)	8:30 (晴)
越	9:30	9:30
室	10:40	10:40
↓	11:15	11:15
↓	12:30	12:30
↓	13:00	13:00
↓	14:00	14:00
↓	15:00	15:00
↓	16:00	16:00
↓	17:00	17:00
↓	18:00	18:00
↓	19:00	19:00
↓	20:00	20:00
↓	21:00	21:00
↓	22:00	22:00

風は強いため、快晴。一、越

にスキーテボし、雪却側に雪を撒いて

捨てたが、雪が融けてしまつた。

がうアイゼンを利かせ、露岩の間に隠

れ、天狗小屋までもう一と滑り。天狗

小屋まで走り、天狗小屋までもう一と滑り、天狗小屋までもう一と滑り。天狗

小屋まで走り、天狗小屋までもう一と滑り、天狗小屋までもう一と滑り。天狗

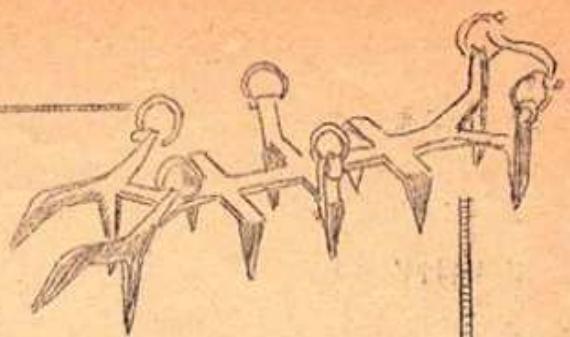
小屋まで走り、天狗小屋までもう一と滑り、天狗小屋までもう一と滑り。天狗

小屋まで走り、天狗小屋までもう一と滑り、天狗小屋までもう一と滑り。天狗

小屋まで走り、天狗小屋までもう一と滑り、天狗小屋までもう一と滑り。天狗

雪となり雪原の中ルートを見失う。
天狗小屋を出て間もなく寒い次

8:30	9:15 (晴)	9:45 (晴)	10:10 (晴)	11:50 (晴)	12:50 (晴)	13:00 (晴)
8:45 (晴)	9:45 (晴)	10:10 (晴)	11:50 (晴)	12:50 (晴)	13:00 (晴)	14:00 (晴)
9:15 (晴)	9:45 (晴)	10:10 (晴)	11:50 (晴)	12:50 (晴)	13:00 (晴)	14:00 (晴)
9:45 (晴)	10:10 (晴)	11:50 (晴)	12:50 (晴)	13:00 (晴)	14:00 (晴)	15:00 (晴)
10:10 (晴)	11:50 (晴)	12:50 (晴)	13:00 (晴)	14:00 (晴)	15:00 (晴)	16:00 (晴)
11:50 (晴)	12:50 (晴)	13:00 (晴)	14:00 (晴)	15:00 (晴)	16:00 (晴)	17:00 (晴)
12:50 (晴)	13:00 (晴)	14:00 (晴)	15:00 (晴)	16:00 (晴)	17:00 (晴)	18:00 (晴)
13:00 (晴)	14:00 (晴)	15:00 (晴)	16:00 (晴)	17:00 (晴)	18:00 (晴)	19:00 (晴)
14:00 (晴)	15:00 (晴)	16:00 (晴)	17:00 (晴)	18:00 (晴)	19:00 (晴)	20:00 (晴)
15:00 (晴)	16:00 (晴)	17:00 (晴)	18:00 (晴)	19:00 (晴)	20:00 (晴)	21:00 (晴)
16:00 (晴)	17:00 (晴)	18:00 (晴)	19:00 (晴)	20:00 (晴)	21:00 (晴)	22:00 (晴)



僕と登山用具

辻勝四郎

今でこそ、冬にでもなると人並みにオーバーシューズにハ本仇のアイゼンをつけ、オーバーアズボンを履き、目出宿を冠り、ついでにセロテープで足り合いでゴーブルなどを着用にまんで颶狂れお出ましになるのだが、一もつとも

やり治んどがK用品株式会社特送の、或いはアメヤ横町で編の日雇の目で床し求めたいわゆき船渠品ではあるが、一本未だ無精で貪乞性に生ふれつりいる僕は、つい最近までは浮衣煮然とした風体でてゐに酒ましていたものだ。

「何、今でもコジキに毛の生えに様なもん下せし」という声は自ら承知のことであるが、兎角うちこれだけ品目が増えてたといふことにひで、僕にとつては大した連物である。もつとも中には進歩が過ぎて、およそ縁のないシールなどといつもの古風ハ入れて、後にびつて「虫もつかないナイロンだせ」と宣伝され積めてわざつぱり裏い手も付かないヒーリング代物もあるにはあるが、

う十年何がし、時折自分の部屋に坐つて壁に掛つてある道具の数々眺めていると、そんばかりの用具にまつめる秋々の氣弱がふと頭をかすめでは、苦い笑いをもつすのである。

◎リュックゲツフ。

終戦直後は学校に通うにも、カバンの代りに軍隊で使つていた荷物がほやつたものだが、僕の最初の頃の山登りにはあの稚慶や風呂敷に麦飯の弁当や寿司や秩父の山々について回つたものである。それが平の賣い出しに使われる称な子製のザックに取つて代らぬ下のは何時り手だつたうか。サブザック五一回り大きくしに餘るその子製のザックには随分長い間マツカイになつたものである。

「假のリップ」もつ何年かの古風が神みつりでいる。指手が変り、はさものが變つてもこのリップだけは同じだ。これをくるくへとしめ、ひょいと背に乗せスクコラントサニ始めるのだ。

（へ漢棲ヤ一號）。

南アの一週間くういの山行には重宝にして使用したちのだが、パーティ五組むとサックが小さいという理由で人手り小さき荷で樂る山旅を重ねたものだが、それが後日懐れない重荷に苦しめられる一因ともなつた。だから、物々哀し悪しは一概には言えまい。

そのサックも何時も間にか行方も知れなくなつて、記憶の外に消えてしまつたが、最近の或る山行で、「Yさんはすげえサックミ育貢つてるだ」。という声に振り返ってサバウ、さざれやけい僕のサックがボロく、残骸に化してほいにが、Yは背の上で未だサックとして立派に存在画直三示しているのを知りてオヤくと思つた。

Yといふ男は、僕の過去の中でも、まだ安らかに忍つていていた男だ。

◇ 靴 ◇

或る時、「珍らしい道具がありますね」と不思議に見たり、僕が登山靴を履いていた。二と程左様に長い間僕は登山靴という名の縁が付かつた。

南アや北アの長い縦走でも、夏なう訪宿地下足袋ぐ用が足せんし、複雪期の谷川岳や剣の雪渓の上でも地下足袋に革カンジキ玉つけて登降したり、制動干効がないのにアリセードで一気に滑り下りる様子甚ちやつた。さすがに冬山は地下足袋ではニの足と踏んどが、どんはそれでも置きの片隅からほりにまかれに不口くのスキー靴を取り出せば、立郊の山や谷川くういは稼げにもうである。

当まき。

ホウバと云ひは、旧制の名残りのふくは僕等は通学には不ウバミカランヨロンと鳴うしたものだ。時あにかも丹沢あたりでは下駄ぼき登山者が流行して、心あう者を嘆びかわせにものだが、地下足袋姿が巷中では貴重しかつた。僕ども、こんな風潮に心安く軒合して、渋沢やエ合などの構内をラン／＼と歩いた。

或る時、土合の駅に降りようとした。ラム長に革カンを付けて登ると言

い出しに時には、僕もいじやが寧ろいたが、それでも僕ラムキ一靴を次の組合で履せよということが脚筋が付いた。もつた。考えてみると十一文符にかかるのが優ける靴ヒ十文に満たない僕が愛用していくのだから、今にして思えば愉快になる。Yはその帰りには頂上から尾根とコム表で下つてしまつたが、丹沢の塔ヶ岳から大倉尾根を齒の長い不ウバで歩き通ーの前歴から較べれば、彼にとつては大して奇とするには當まき。

につけたりで背の荷物を振うれて横転、下駄がぬりて傍うる溝は落ちて流れ出しことかあ、た。「落りに落ち」と強いたう、カンテラ提げに駄賀が何草むらんと一宿懇意追、掛けて行つて、そつナビにて切つ下駄をつまかエアに時には「あ」こうせは天国だ耳」と僕おしかく感じたものである。

そんなん僕でも、時にはベリツとし下折り目つきに日本車両と寝ていて丹次あたりに出掛けることもある。おっとも、それば折詰に見送りに行つてぞうます引、張り出されに、

鮮牛の市岳連峰高祭り時である。

◇シユラーフ◇

長い間僕等はテントで寝ても小屋に泊らたり穴あいた毛布で通して来た。ジムマークの付いたシニアーフが出回つて、寝袋を使うのが当リ前も腰弊へはつて、さつぱりその思惑に落とすとしなかつた僕等は二人で一枚の毛布を抜き毛布を相討

にして寝たもうだ。すると時として、親切心で起こしにもうか小屋番が黙つて壇回すと掛けて寄こすこともあつたが、寝具、代五十日也と号してかえって向々として寝られなかつたものビット。

小屋では毛布一枚でもまだ寝うれしか、テントと寝るとさうモいかない。溪谷一弓にこんなのがある。

「アルヨーもがあれば食事の量など少なくつたつていいんだそうだ。妙く味う事が好きで、どり食間にちサラダ

ラと振り掛ける。それを又脚淺く美味でうにはくつく。

明日

高級生の時代から僕の使い慣らして

いるのはハンティングである。睡眠鏡にゆみり如何に多島打帽といいにい様

有古のがしいハンティング玉かぶつてい

にうで、二十前から三十男に見うれく大柄りしにやうじつた。以前のハンティングは、雨が降ればすぐ頭の中を濡れ直す不可防水を効いていい早い不ロイ取扱いにうで、テントの中をユボレモウ

方をがあると「あいよ」と抜かり小

うが今はそろば併を間屋か卸してくれない。例え、大、大さんりどと言う齊年寄りと一諸に旅に出る、被えでラシニースが鳴り、飯がたける香いがすう頃には、未だシュラーフ中で寝ヒツくさせたう櫻門を止り、味噌汁の香いがテント中に立ちこめう頃、「やあ夜が明けた月」と云い乍う今ぐりびとしてついでにその寝起きの手に着を持て、といういう焼肝を持つようになつたのにかう、考えてゆうと算するより立派な様だな」とさりだ。

◇ 帽子 ◇

高級生の時代から僕の使い慣らして

いるのはハンティングである。睡眠鏡にゆみり如何に多島打帽といいにい様

有古のがしいハンティング玉かぶつてい

にうで、二十前から三十男に見うれく大柄りしにやうじつた。以前のハンティ

ングは、雨が降ればすぐ頭の中を濡れ直す不可防水を効いていい早い不ロイ取

扱いにうで、テントの中をユボレモウ

方をがあると「あいよ」と抜かり小

雅布代りにさせられたので本人を

三

卷之三

僕の皮は、仰々面に漏れず、天の皮である。毛の色が真黒けりて知らざい人は「ニホンは何ですか、熊ですか？」

七〇

どう殿違いしにかむくと起き上るや
尻尾三巻いてとつとと撫ひ出しだ。何
處ぞの誰れか力ふうに飼い猫とがつね
して皮を剥ぐもうほむごい事をすら僕

「遂に房のて春をかづけ止」の
にびに「この間ナ何處かで見たこと
あるだろう」とニヤく笑ふと、頭
の上に来る。ていうハントーンを聞いて
は、「俺うかがつて いるのより、そ
いっは百川が 高いんだぞ」ニ文アリ
云つてば心情おどやかならざるも
うを感じますのであり。

「そうですね」と聞くと、僕はそんな暇いゝも満まして
「どうです」答えると「どうじですか
、並み毛というわけ案外柔らかいもん
ですわ」と撫でていう。

一項ケロルハットが流行つて僕も
父リ古ハットを一生懸命にいぢくり
まゆしたもりビニにかとうく満足
な恰好にはならなくてアカでしまつ
に、今でほハントングヘレーリキモ
リが大いに瘤を効かせていて、生来

用前らしい僕などがかかるば一層引き立つのに、もうこれ以上すうとうにモテてほかほ小様ひきで相處うす野暮うたいハントングとかが、て

である。

僕の勤め先には大きな老いほれた土佐犬がいる。そいつが昼夜をしていき所へいって毛を撫で乍り、「ニホガウ立派ダブルに立るな」と言つたう。

石破事と笑うのけにはいかない。
今は人並サト無理手段して穴あきじ
ツケルなどと振り回しているが、折角
穴う効用もさつぱり發揮されまいじ
きいやい壁う釘に引掛けられている
時ぐういにしか面目を保つまいりい。
古いヒツケルはシャフトを取うれず

つい頃、僕はこうアクリアリードが歌う
くれって、親父のニセモルヒテ裸上剥
いで縫い合せて作つてみたが、さうす
り見栄えがし可かつた。そり次に黙フ
ておからくり鬼の櫻巻を解体して作つ
たら、罗ゲトラフルも起きて、前分

そ今頃は岩を登る時ばかりで岩を
こ辟いて足場を作らねばと思つてい
ただから、今から思えば噴氣もまだ
ある、せんなわけで、時々丹波あたり
が火でヒツケルミ持つて登つていろ登
山着玉見掛りでも、僕は身につまずかれ

一期一春 谷川岳宿

5月1日—4日

一ノ倉・一ノ倉・一ノ倉
沢根岩稜子壁
尾シ帽奥
東ボ南鳥沢
エ工

《参加者》

ム辻勝四郎	山果滿栄
山崎外一	村田良輔
脊藤良則	高倉健二
長井宏子	森原健
柏浦哲	



麗にメイキされて置かれている。時折、そのジッケルミナツめでいうと、満足な裝備もなく、金がなくとも、今よりも純粹に何う悩むもなく、素直に山登りと樂しんでいた僕にとっては良き時代のことだが、ふつと懐かしく思い立小々來るりである。(完)

△概要△

恒例の春山合宿は、篠石連休の一日でも使える者を参加対象にす」という事で、今年も谷川岳に次つたが、東面の集中モ企画し、肝腎の三日には、予定した参加者が次々と支障をきたして、結局八名の一ノ倉のミルートにさう放射打登山に終つた。

今年の谷川岳は直年に珍しく雪どけが遅れ、田道、新道とも豊富な雪が残り、不の芽もようやく柔かくぼり始めるにはかりで、下界では余まゝ氣にも留めなかつた桜が山々を周囲では今まで盛りと咲きされていた。だがその春にさまで今年も此の山

△行動記録△

四月三十日(火用)

角り中江辻、脊藤上野三時九列車で出発。降り止まぬ雨の中と工合から新道三マナカ次出合に出で、台地に天幕を設営する。夜行にて深原入山する。

五月一日(星時晴)

辻・保原、脊藤出、次石侵の登攀を志すも、右俣スラからの雪渓が越極めて悪よく、左俣の雪渓ミ一気にアリセードで下つて帰着する。中間リッナド於て

中央壁登攀のハーテンの音を聞いたが、後日、彼等が転落事故に遭ったことを知る。

夕刻村田入山する。

五月二日（曇後雨）

夜行にて山崎、山鼎（瑞）、長井入山する。今日は一ノ倉放射、三ノ子探していにが、朝から天候悪く全員で東尾根を慢歩しようと出発する。しかし、次々行列に碎易して角び陳習行は予定を変更する。一ノ倉でグリマードを楽しめ、次いでマナガ次に取つて返したが、こちらは色彩も鮮やかでスキーヤーの群、滑走五更物しながら、ピフニツクと洒落込んごお弁当とあける。「Yさん、お君たうひとも二人は真似出来ねえよ」と言ひながら、一同不遊びなどと始めにりする。

適当に遊んで帰幕、うまい具合に午前から用と有る。夕刻長井下山する。

五月三日（晴）

高倉、柏浦を行にて入山。朝から抜けるようす青空である。十桟の裏面集中が参加人教り開示で、東尾根、南段、馬場ヲ天與壁ヲ三バーティに分けて一ノ倉放射放上する。

東尾根班二時三〇分帰幕その後下山、南段班四時帰幕。高倉下山。馬場予班廿三人でザイレ一本という豪傑けちからんぞ、一日では食りきれず上部テラスで二バーテ、今止駄やかだつたベースには、今夜は春藤一人脚立に付。

五月四日（曇）

鳥帽予班二時半帰幕、にじみに天幕を収めて下山、合宿終る。

は、おいおい成り立つていかないどううこいノニ、これがさびしい暗不ト寺うぢりれば良いりだが、

参加者が確定しないか、に鳥、最高チ

チ問題を残しておが食糧計画である。

荷物一本にまとめるのがかつて鳥に合宿を通じて野菜類が不足するというチ

チ問題を演じてしまつた。

技術面では新人が居ない意識習にも身が入らず、荷物合宿前半は大いに不

る人でしまつた。

春山に豪傑の骨を養つた、これが、今回も合宿のいづれも大失態である。

一の倉一の沢

東尾根

期日 五月三日

Mem.

藤原・柏浦
山県守

滿縣榮記山

けですまくと翠り出した。オーパ
ト音で後に聞く、ほんりぬすかぼ仰
ぐが、昨日う雨りせいかぬくして
いて寝な感しがする。登りきると尾根
は左折して明かるくマチガ沢を眺めて
快適に進む。

あつこ思、

た時マチガ沢に小さな雪

崩があこり、登山君がくもろ子立散ら
すすうに迷ひていた。一ヶ月遅れの季

候とやらで、雪も多く重積もあり、昨

日も六ルンばかりで大き音にてて

ていた。雪のついに尾根と一步く追

む。いくつかうコアを越え、一、倉劍

とフサ他はそのまま登る。アツ登

トうしく一心トレースはついている

。右から一枚沢を過ぎ左にまわりこ

むようにしながらじぐじぐ登り一

時間ばかりで、シンセンのコルに着

く。

オニ岩峯下でニミのバーイ
が順番とまつてゐるが、我々も腰
と降す。一時間足らず絆つと噴や
と着かさうで下へんかサイ毛玉つ

西尾根とくたり始めう。ここも雪が
多い。途中からマチガ沢に入り、昨日
渡済ーにたりマードと尾根マードを併用
し月から燕亭テントを着いた。
他オバーテイに置手杖として四時四
五分合駄をあこした。

ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ
ス	ス	ス	ス	ス	ス	ス	ス
タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ
イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ
ム	ム	ム	ム	ム	ム	ム	ム
ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク
ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト

ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト
リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ	リ
ス	ス	ス	ス	ス	ス	ス	ス
タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ
イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ	イ
ム	ム	ム	ム	ム	ム	ム	ム
ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク
ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト	ト

錄烏帽子沢奥壁上

記
一本型子ムールト

宿期五月二日丁巳日

金
川
村田俊滿

サイルに引張りれるようにならぬ

中を這い上りでいくと、急に暗い前

原がつに本谷周辺の老翁が姿を現わ
し次。ふつと足元を覗くと、古井戸
のようだ黒々としに岩が垂直に切れ
落ちていて、ぞり底の傾斜のついた
スラアラ上エ、落石がカラん／＼
と不気味な反響を残して落ちていフ

間心に描いていた鳥帽チ岩の直下に
立た。

仰いた。殊墨リテ軟ケイ春

仰いた。腰墨りの軟かい春
の陽差しに受けた鳥帽を岩
が、意外に大きく力強く立
つていた。その時「どうと

う登ったんだな」という実感が胸にせきつて来た。す

記部四回勝利辻
か陽差しを受け天鳥帽子を落
が、意外に大きくなり立
つていた。その時「どうと
う登ったんだな」という実
感が胸にせまって来た。す
ると我知らず頬が歪んで、

トはがつてゐると言ふことさえ、大いに驚異だ。たゞ、だが行せばアブミを使
い乍ら正面ルンゼを登って、いよいよ登攀者
王賺めでいると、「よし、俺も何時か
は必ず登るんだ」というむうくと
した野心が、湧き上りのを押えること
が出来なかつた。

岩の裏側から「アアアア」声が掛つて、サイ
ルが「猿不う中三スル」と動き始める。
僕は若いMヤマヤに自分を羨頬を見せ
る事が恥しかった。そして慌てて手拭
で涙を拭うと、両手でカツシリと着木
を掴んで、靴の中三鳥幅テ岩に向つて
登り始めた。

初めて南極を登った時、二ヶ月を冲
すすむうち急に壁に、二人り登攀者が取
付いているのを見て、僕等は思わず寧
漠り声を發したのでした。まだ一、
倉に馴染みう薄かつに僕たちは、人も寄
せつけまいようがこんな壁が登攀ル。

壁の横面をつつめていると、不安と期待とが交錯した複雑な感情が、胸元あまりも決心ちつかずたテラスに横に立つていた僕は、遂に意を決して「よしやろう」と起き上つて、寝意にかナマ／＼と鳴らし乍らミソ直具を身に付けていた。だがその背後で、僕に登れろかねー」と言うパートナーリカさんの言葉を耳にして、僕の決心をあくびくアラ／＼と押しつぶされてしまつていた。

それから一ヶ月五いて、僕は芳い子と岩場の基部に立つて、壁の一部しか姿を見せない、霧の深い日本だった。その日も長い間スラフでもなくして僕、僕は意を決してサイルエンドがと岩場を取付さに足を掛けた。だが丁度さす時突然ドロゴ音が耳に入つて、僕は思わず踏み出した足を引込んでしまつた。本谷の雪渓が切れで、登山者がラントクルフトに寄りたつて、完全に出発を阻かれ

て、壁から威圧を躊躇する事も出来ず
に自分を貢献させよと叫びしめながら、壁
玉背にして僕等は退却を始めていた。
そり エボンスラブ三下り乍り、僕等
二人等精神状態ではどこも鳥居下には
登れまいと思った。そしてより年はそ
れ以来とうく一・倉に足を回りか
つた。

白いスラブに上り、今日の登攀の爲
に用意されたトモう可、朱う色も鮮やか
な新品种のナイロンザイレンが投げ出され
ていい。僕等はその横で、こもれ新う
しい補助サイルのキンク三合していい。
中央棲上部に登攀者が居て、時折豆
粒でかい落石を起しては、エボシスラ
バウニ端に居て我々を助けて、頂
安う馬場ナ岩すではつきりと見渡せう
、抜ける様に晴れ渡つに蔓やかが春の
朝である。

の中央部三五上に慎重に木一トモ捨
て登り出す。二十糸ワンビツチ、岩
角うみテラスに出で後壁ウソミ確保
する。南棧ヲラツクリの上に居ラシガ
手を據、て合図ミ送、て東ド、オニジ
ヘナ頭上の凹角ミ登り始めたが意外に
速く、指示これで一旦下に降り凹角
石手の腕いりツベニ岩ミ押えて登る。
上部で凹角ド入り左手の草付バンドに
京リ禪うシとするか、上筋リ岩ハカガ
つていてサツクがつかえて苦勞する。
漸やく這う様に体ミ折り曲げてバンド
の上に出ると、此处は足がや、と京う
草付浮いたレッケで、後続者に背と向
けてタハーチンヒレーである。三人が
立つには無理ガラで、セカンドド中止
してもう、て角び登り出す。パンドリ
末端は足ミ掛けると崩れり様だそろい
草付、ハーチンミ打って吊下がう様
に左手の岩ド桟る、ここは水が流れて
いて、丁度南面ミ沢ノ廣場ミ様は左ラ
堅い斜面が父、奥壁ミ南壁から横切
る顯岩等バニドまじめかほ処でナイ

ルが一杯になり、ハーベンミ打って
ビレイする。ラストオムが誤まって
カラビナ一ヶ丟失する。

ハンド上部は殆んど直角に切り立
つていて、頭上の草付付かない手
切れう様な聖い岩には、下から鋸り
ついにハーベンが達打してある。
右手正面ルンゼ側からかさんじ食う
ルート方が容易なのを知りては居
たが、どうせ登るなら平心えりある
處と最初から予想していくに僕は
躊躇することもなく正面の聖壁に取
り付いた。次々とハーベンにカラビ
ナセットして二個アーバミを使
て吊上げて登る。上部は傾斜が緩
くなくて、クリップの効いた部分
良い岩だ。だがここでカラビナがつ
き、ビリフリレイにはハーベンを
束ねしに棘りないカラビナを使う仕
未だつた。

下から仰ぐ複数ナムニ付、内部
は暗く上部は外側に張り出されていて
、そう左壁を流水がしたたり落ちて

いた、サックと外して左端カーラック
に滑り、基部からチムニーの内部に入
ると、頭を落す水滴で眼鏡が曇った。

スムースガーリーと背にしてバックア
ンドフートで登り出す。上部にはハン
グからかさえて、体は次第に外に

飛び出す様になり、不安そうに見詰め
てゆきやう類が真下に股の間から
現れて夏えト、ハーベンにアーバミを掛
けてそのまま外側に体を振り上げていく
と、体勢は外を向いて大きさとほり、
ここでハーベンに頼りて乾いた右壁に
乗り移る。

今立着していく太陽も、とうく鳥
糞テ岩の右側に姿を没して、チムニー
で濡れた身体に急に寒さが襲ってきて寒
い。補助サイもご昂上げるガックミ持つ
来る程にヤツケミ取り出して着用。
時計は何時も聞きたが三回った。

行き間じ高さの中央壁の巣り中に居
る登攀者から、「ヤツホー」という声
が叫ぶ。彼等はもうまもなく登攀を
終うとしてゐたが、我々はやっと壁

の三分の一を終つたばかりだった。
そこから一匹千聖い岩を直上して
、位置ハーベンクリアの外傾したテラス
から下り貢体に右手に草付ハンドミト
バースして正面ルンゼに入る。

今年に入つて、登攀者の入つた形跡
三隻せりいこりしには、ルートは
何處にサイしに触れただけで落ちる
様な巨き浮石が不安定に幾つも東つ
かゝつて、登攀よりも先ずそり監理
が一仕事だった。手で触れて落して掃
除すれば、並作のせいことだったが、

今朝かにエボシスラブリ取付きで炸裂
しに落石の集中攻撃を受けた自分には
、例え今頃エボシスラブをウロ／＼し
ている登山者が居るとは思えなかつた
としても、せんぐ人厚い落石を起す
という事が、妙に罪悪感として引掛つ
ていた。

ルンゼニーハンチ登りと、そこから
ルンゼを離れて岩の堅さうな中央カン
テラ側面に乗り出した。だが、そこは
明るかにルートではなかった。

谷川岳一ノ倉沢工ボシ奥壁・ルート図

(original
J.C.C 小森康行)
—岳人126—



- ① ~ ⑦ 20木木一木二木かい。
- ① ~ ② 20木もういりべと登り
手前四工門に入る。
- ② ~ ③ 20木水の境ある木高落
石。③より手前ハンド三出
ぬが急30度。
- ④ ~ ⑤ 20木壁に沿うテラス
達限吊上げて登る。
- ⑤ ~ ⑥ 20木ナムニ一木壁木流
水あり。
- ⑥ ~ ⑦ 20木壁の岩を直上、⑦は
外壁1木テラス。
- ⑦ ~ ⑧ 30木壁ハンドドローパス
してルンで入る。
- ⑧ ~ ⑨ 20木浮石のつまドリセ

- ① ~ ⑩ 10木レインジと抜ける處
急30度。上部攀上。
- ⑩ ~ ⑪ 10木 草付ハンド⑪は
ニ、二人立てるアラス。
- ⑪ ~ ⑫ 30木 ハンドから直上し
て草付壁角を登る。
- ⑫ 20木壁アラス(ビバーブ)
- ⑫ ~ ⑬ 30木 想・ハング⑬は
灌木のあるテラス
- ⑬ ~ ⑭ 35木 壁付壁角
- ⑭ ~ ⑯ 40木 壁付と露岩
登攀終了点

- A: 南稜アラス
- B: 変形ナムニ
- C: 正面レインジ
- D: 西面岩壁
- E: エボシ岩
- F: 尖先カンテ
- G: オーバーハング

辻勝四郎
山崎弘一
村田俊満

《装備》

- ナロングザイル(40m) 1本
- 補助ザイル(80m) 1本
- カラビナ 3個(内1個失)
- 使用ハーケン 11本

聖いヒ思つに岩は見掛けだすで、手と骨するヒボロフヒ大キヨブロツクのまゝ利害して、急な壁に反響支残して落ちていつた。横みにするハーテンカリスが開いて喰わなかつた。強引に取付いたので戻るにも戻れなかつた。

ルンゼ内の門が、取付いてから一時間近くになる事を告げて来た。

「よし恩い切つて登るぞ」僕は手で二三回振れば抜けそづは、殆んど頬りにならぬハーテンを支え方にし、吊上げて登る事にした。それは土壇場に立たされた自分の弱さに謀せられた、一つの賭に違ひなかつた。

そこから一登りすると、そこはもう中央カントの上端で、ザイルが一杯のびる草付の脚石の上に僕ほどかりと腰を下した。

右上の小さなテラスから、右に草付エトラバースすると、途中でバンドが切れ、ハヨケンに助けられて腕の岩を直上して草付の凹凸を登りつ

聖いヒ思つに岩は見掛けだすで、手と骨するヒボロフヒ大キヨブロツ

クのまゝ利害して、急な壁に反響支残して落ちていつた。横みにするハーテンカリスが開いて喰わなかつた。強引に取付いたので戻るにも戻れなかつた。

めると、そこに此の壁初めての露壁な

テラスが姿を現わした。五時半、ラストの門がテラスに足を踏みいた。

テラスの上部には一連のハングが私

がつていて、その左端上部には朽つた

捨處が不意咲に下つていて、明る

いうちに稜線にとば出せるかどうかの

判断のつかない武々は此處をバーク

サイトと決めて一夜を明かす事にした。

二の求出合に群がつて居た登山者も

姿を消して、眼やかだつた一の倉にも

、静かに夜が訪れようとしていた。

危な岩壁上に荷物の体に張り出した

テラスにハーケン陣を敷き、着られう

物を身に着けて、草鞋を靴に履き替る

と、漸やく人心地ついて我々はテラス

に腰を下した。

ソーヒージヒキーズヒパンヒ裏物で

腰を酒すレ寝られるうちに寝つても

うと早々にツエルトを被つた。だが宵

の口からうしくしていふと、時折第

五時。もう完全に夜は明け放なれ

五時。それは登向かへた懲罰された、不足味

でてして寝快は雪閉り声であつた。た

まり涼れて一時にツエルトを懲りり上

げて見ると、真正面の炬火スラブの上

瑞々つ。夜月にも白い雪の荒れび、何

百本のスラブを一隻に滑つて、港下

筋に轟然たる反響をひゞかせ矢づき崩

れ音うつていつた。

一の名は夜にへつても、完全な闇の

座には没まなかつた。着火上部が巨大

な発煙のようす空々し、シールエットを

作つていて。三日月が鳥嘴子の肩に掛

つて、降る杯は蒼天の星空だつた。

雪崩は塵地悉く起れた頃に可笑い、

その間を経つて落石がカラカラと落ち

ていつた。

膝を抱えてまゝ岩の上に坐っている

体勢では肌が痛くなつて長くは眠つても

いいればなかつた。二時を過ぐる頃から

眼が冴えて、とうく起き上つてメタ

エタナ

て、間もなく鎌く切れ者うた中矢轟
の右手に、太陽が昇る。

六時、直下に見えるエボシスラブ
と、豆粒のような今日一番の登山者
が登って来る。間もなく、一、岩の
賑やかな一日の活動が始まる。

「よし、いくぞ」僕は手に唾をつけ
ると、テラスから一步左手に足と踏
み出した。そこは奥壁最後のボイン
トであるオーバーハングの下だ。

積み重った脆い岩の上の、ブヨブ
ヨとしに草付きた足を置くと、足元
にエボシスラブが白く大きく広がつ
て見えた。そこからルートは一旦テ
ラスの壁根の様子一枚岩に移りて、
左手の小さなクラックに沿つて直上
する。だがそこに移るには、一
本の根の浮いた灌木を唯一の手掛り
にして直い上うだければならない
だ。試しに手を掛けてみると、根が
あると持ち上げて薄荷味悪かって、
灌木に力を加えないと様に反動で一

枚岩の上に出る。だが不安定で一枚岩
に乗っている草付た足を置いてみると
、その上うハングはスムースな岩肌で
ホーリドが全然得られない。その時急
に両足に今に経験したことのない震
音の激しい痺痺が襲つて来た。

僕は思わず右手の捨縄に手を掛けた
。だが一セニチも入って居ない支卓の
ハーベンは、ぐらぐらと動いて今にも
抜け落ちそうで全然頼りにならなかつ
た。やう落ちる事を観念しながら、フ
ラックに打込んである下向きのアイス
ハーケンに隨りついに時、「助かる」
とと言う安堵感が、溜息のような大き
な息をつかせた。

三段アグミを掛けて、吊り上げてハン
グの右上に出る。二段の外傾しにテラ
スにハーケンを打込んで、右上に見え
る三本の枝を出した灌木の方のテラス
に出てにしてしまふ。上部には草の混
合角が左手に長く延びている。ここ
でオーダーと変えてMにトップを登つて
もらう。ラストの廣は、面倒だから、て

補助サイルで歸はれたまま登つた
次のピッチ、Mが露岩帯と直工した
が上部で手ぬい壁に突き当り、捨縄を
使って左手の凹角にサイルトラバース
する。そして上部をバンドとトラバー
スして敷の中へ消えてい。

トップを譲り、今今は全身かう力が抜
けて、急に咽喉の焼けさ様が激しい湯
玉喰えた。そうだ、昨日から満足は水
も飲んでいなかつた。「北さん、
此處が鳥帽ナ岩ですよ」敷の中から、
Mの元氣のいい声が掛つて来た。僕は
牛の林にザイルに引かれ乍つ、ノロノ
ロと最後の灌木苟を登つていつた。

▲コース・タイム▼

計	9.30
形ナム=一上	14.00
中央カンテエ部	16.30
下テラス	18.30(油)
発	2.00
発	10.00
峰	12.00
耳	13.00
マ	14.20

山行報告

三

期日六月五日

江蘇四部
陳原健二

篠原 健二

今日は龍沢下都三日様にして東に
止さんも、天舞がかんばしく引い
下のファイトが消滅し、ミルンゼ
に入ることになりた。

今日は鹿児島市都心日暮に来て来た
辻さんも、天舞がかんばしくアリ
トのファイトが消滅し、ミルンゼ
に入ることになった。

本谷ハントでゆくにほきがえ
う。五センチ以下部から雪床どう
しにチヨツクストンのうちF1を
する。F1の上部から向側り草付さ
と左に回り込むと、50米程のF2の下

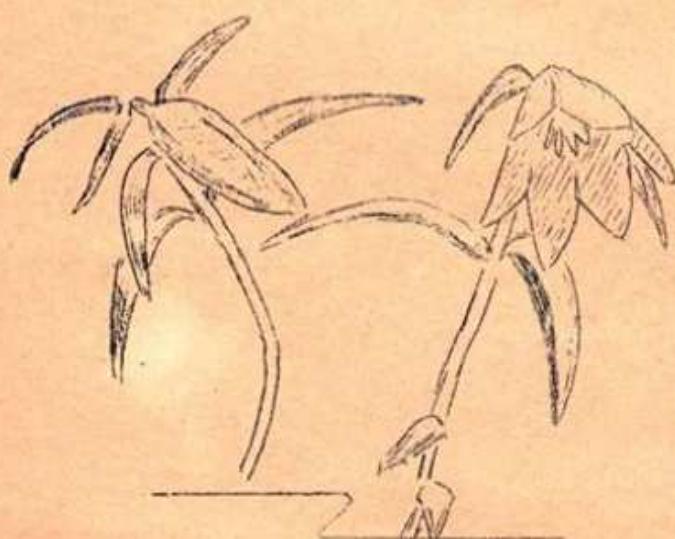
雜踏する工合の駄を後に、満天の星に音と良くながる一、愈り坐合に着く。丁度一ヶ月前、宿泊の時にくらべると、今はもう新緑にけりである。

左に畠麦うす真黒に汚れ、一、沢の雪渓をすぐる。ニ、沢附近の雪はまだせんぐり切れておらず、またまく雪上練習などするには樂しく遊べそうである。

今日はエホンスラブまで行かず、
中央鞍から尾根を登ることにする
明け方のあら程良かつた天候も、太
陽が登る頃から薄雲が出て来てありて
かはすれど、今リシーブンは南極え
入る者が圧倒的だろく、テラスから
はけ出して休憩する。

〈ヨース・タイム〉

土合	3.30
南稜テラス	6.30
F2(F)	7.30
F2(口)	8.20
キノコ状々岩	9.00
核縁	11.00
	12.00



の中を水が流れでおり、石の草付をまき下り上に本る。こゝは夏晴うしくよく非常ト好特の良いところである。下の一部ドリ草付まじりラブミ左手リ尾根に向て登り途中キノコ型の岩を中で見ゆしとる。こゝより案に相違して天気が良くなり穀筋に出た時には暑くてにまうなかつた。

冬山南アルプス
合宿

34-12-27 —— 35-1-5

メンバード

江江雄男滿子榮彥
正證昭悅後敬清昌

井瓶汎游田林升泉
岩近大巢村小筒山

二博之郎祥毅
介寅四正

10月八日の山詣会より冬山合宿の計画が始められた。合宿候補地としては最初谷川岳東面、谷川岳北面、日光白根・立峰・南アルプス・北沢・富士山、中央アルプスが出され、それそれの長所・短所について討議された。

10月22日の山詣会では以上候補地の中から谷川岳東面と南アルプス・北沢の二つにしほられ、両者について議論され結論がでています。

11月6日 の山詣会にて前二者の中より南了北次にて合宿を行うことハ決定し、それと併せて各用テントを購入することにした。
月21日() 23日の3日間、龜江・楠山・
篠原の各氏によつて下更山行が月され
それとども各々が決定された。

11月27日の山詣会で下見山行の報告がなされ、企画も具体化され、食料・装備の計画も決定し山行とまつばかりになつた。12月27日より1月5日まで北沢を中心にして仙丈岳、駒ヶ岳、アサヨ峰で登行訓練がおこなわれ、レトノル設営等の練習が行われた。

概要

行動 記録

先鋒隊 I (L. 菅野・齊藤・楠山・保原・松井)

- 27日 清和(5.30) ————— 新宿(6.30) ————— 辰野(12.58, 13.10) ——
 (晴) 伊那IC(13.50, 15.00) — 戸台(16.40) ————— □ (17.00) ——
- 28日 □ (10.25) ————— 楠島ヒュッテ(10.55 11.25) ————— 丹波山荘(13.50, 14.30) ——
 (曇) 北沢(12.50) B.C 設営
- 29日 B.C(12.00) ————— 菅沢分岐(13.00 13.30) ————— 仙丈岳(15.20) ——
 (曇) B.C(17.00)

先鋒隊 II (L. 辻・黒江)

- 29日 前夜新宿発(22.45) ————— 戸台(9.00) —— 丹波山荘(13.00, 14.00) ——
 BC(17.20)

- 30日 B.C(10.35) ————— 仙水峠(11.45 12.00) ————— 昼食(12.35—13.00) ——
 (晴) 駒津峠(12.30) ————— 朝霧(14.58 15.10) ————— BC(17.08)

- 31日 全員停滯

(曇)
 (雨)

後衛隊 I (L. 柳沼・麻崎)

- 30日 新宿(11.32) ————— 伊那IC(18.30)
- 31日 伊那IC(6.45) ————— 戸台(8.30 8.50) ————— 丹波山荘(11.30 12.30) ——
 BC(15.40)
- 1月 全員停滯、冬天幕張移し、イーブル設営
- 2月 BC(9.10) ————— 菅沢分岐(10.30) ————— 仙丈岳(12.00, 13.00) ——
 (晴) BC(14.30)

後衛隊 II (L. 山県・筒井・4林)

- 1日 新宿(8.10) ————— 伊那IC(15.00) ————— 戸台(16.40) ——
 楠島ヒュッテ(17.10)

- 2日 楠島ヒュッテ(6.45) ————— 丹波山荘(8.50 9.15) ————— BC(12.10)

後衛隊 III (L. 大武・羽田・梶瀬・泣藤・岩井)

- 2日 前夜新宿発(23.05) ————— 辰野(4.35 4.37) ————— 伊那IC(5.06 6.15) ——
 戸台(8.00 8.25) ————— 丹波山荘(11.00 12.00) ————— BC(15.00)

- 3日 ① BC(7.35) ————— 菅沢分岐(9.10) ————— 仙丈岳(11.00 11.50) ——
 (快晴) (雪上技術訓練30分) ————— BC(14.00)

- ② BC(7.35) ————— 仙水峠(8.35) ————— 粟沢頭(9.30) ——
 了りヨ峠(10.00 10.45) ————— BC(12.15)

4日 BC(7.10) —— 仙水峰(800) —— 駒津峰(930 9.50) ——
(晴) 駒ヶ岳(10.50 11.45) —— BC(14.40)

5日 BC撤收
(曇) 北沢(9.50) —— 丹沢山荘(11.30 13.05) —— 戸台(15.25 17.10) ——
伊那山(18.35 18.41)

日程表

氏名	12/27	28	29	30	31	1/1	2	3	4	5	B.C 泊数	備考
菅野達也	△④④↑	②	↑	↑	↑	△					3	医療
齊藤良則	△	北沢 BC	全員 仙人 休憩	停滯	全員 休憩	△	停滯	仙	停滯	△	8	企画貢録
藤原健二	△	北沢 BC	全員 仙人 休憩	休憩	全員 休憩	△	△	△	△	△	7	装備
補山正毅	△	北沢 BC	休憩	休憩	休憩	△	△	△	△	△	7	企画食料
松井 祥	△										6	
辻勝四郎			△② 北沢				△	△	△	△	5	C.L.
龜江資之			△					△			5	L.食料
柿沼 博				△② 北沢		△	△	△	△	△	5	医療
藤崎介二			△				△	△	△	△	4	
山県昌彦				△② 北沢		△	△	△	△	△	3	会計
筒井滿栄					△	△	△	△	△	△	3	医療
小林敏子					△	△	△	△	△	△	3	
村田俊滿						△	△	△	△	△	3	L.
梶瀬悦男						△	△	△	△	△	3	
大武昭雄						△	△	△	△	△	3	
近藤准江						△	△	△	△	△	3	L.
岩井正江						△	△	△	△	△	3	食料
北沢BC入数		5	7	7	8	8	16	13	10			
駒ヶ岳登頂入数				6					8			
仙人岳登頂入数						7	11					
その他				停 1	停 6	停 8	停 1	停 1	停 2			

共同装備表

品名	先発隊運搬	後発隊運搬	総量	品名	先発隊運搬	後発隊運搬	総量
テント(冬)	1	0	1	用 ハーケン		10	10
テント(夏)	1	1	2	具 アイスハーケン		4	4
グランドシート	1	2	3	カラビナ	5	5	10
エアーマット	大2 小6	小2	10	標識赤旗	50枚		50
スコップ大		1	1	石油コンロ	1		1
ナイフ 小	1		1	ラジス	2	2	4
道具箱	2	1	3	金具	2		2
除雪ブラシ	2	2	4	炊コッフェル	1	2	3
ノコギリ	1	1	2	事 飯盒	2	2	4
ヤードル	12	12	24	用 しゃもし	1	1	2
清掃竹枝	1		1	具 おたま	1	2	3
鉢	1	1	2	庖丁	1	1	2
リール 1(30m)	1(40m)	2		餅焼アミ	1	1	2
アラビナザル 各	自			テルモス	3	2	5
ハンマー		2	2	石油	18L		18L
アバラン		1	1	携 憎	各	1	
				叶ポンフ	1		1
				寒暖計	1	1	2
				他 携帯ラジオ	1	1	2
食 料 品	計	8680	m				

品名	数量	金額	品名	数量	金額	品名	数量	金額	品名	数量	金額
油	2L	160円	福神漬	80g	40円	キャベツ	2kg	80円	二んぶ	2袋	60円
干増	15kg	120	白菜	5束	100	大根	3kg	60	五詰		400
砂糖	2kg	400	紅はうが		50	さといち	1kg	80	ケーズ	5箱	800
			ふりかけ			高野とうふ	2袋	80	ジャム		400
味噌	1玉	40	とろろご		100	ソーマージ	15g	450	竹芋		400
の素	2袋	100	唐辛子		50	コンビーフ	4g	300	ミルク		1000
アボカド	2個	80	カシペース	2缶	100	豚肉	1.2kg	600	茶		150
マヨネーズ	2本	100	ゆかめ	11袋	110	とり肉	80g	400	うどん	4束	100
マーマレード	4袋	120	玉ねぎ	5kg	250	油あり	20袋	150	中華そば	13	370
油	5合	160	じゃがいも	3.5kg	100	さつきあり		100			
豆芽節	5箱	150	Kんじん	10g	100	ちくわ					
大豆あん	2本	40	ねぎ	4kg	120	小	1袋	20			

駒ヶ岳紀行

柿沼博

今日も晴天り更まにて、ハ名のハ
ーティーで、にぎにぎしくベースを
出發し、駒ヶ岳へ向う。私のように
山に対する経験も不然で冬山の天候
の変化に対する的確な处置に自信
のない者には、天候の良否は考へか
りで、あるが、今日のように天候が良
いと先ずオーラ心の負担が除かれ、
氣が樂になる。トップを承りて、
後から讀く一行のアイゼンが雪をき
しませる音互に地良く聞き下ら朝日
のちれる樹林帶を進む。北沢へ出て
昨夏の台風で倒壊した奥高小屋、衝
本が押し流されて広げられに沢すれ
等の様を見て自然の威力の大きさを
感する。しばらくは河原の雪の中を
流れき水流に沿つて登りやがて左岸
の樹林帶へ入る。樹林帶をぬけて仙
水峠に立つとさすがに风が強く、小
り振るご、昨日登った仙丈岳純白

の峯が、朝日に輝いて美しい。ニニギ
小憩して一服、見上げる眼前の摩利支
天峰は、直立な岩壁に雪のつきも少な
く、駒ヶ岳特有の乳白石の花崗岩を露
出し、白い雪と美しく調和した姿は伸
々立派だ。いつか登ってみたいものだ
と、目でルートを探して登っていくと
次第に高度感がでてきて中々手遅れそう
である。我々の今日の登路に目を移す
と六方石よりトラバースする前直は雪
がべつにりとついているが、駒ヶ岳と
摩利支天峰との鞍部附近は岩が露出し
ている。いそく駒洋峰への急登いか
かる。女子メンバー五中にはさんで、
ゆっくりとしたピッチで登る。雪は軟
らかくアイゼンも不要な位だ。樹林の
間から右手に刻々と変る摩利支天峰を
眺め、左手に次第に押し上げられてくる
北岳、仙丈岳と並み下う次第に高度
とがせぐ。樹林帯をぬけて駒洋峰に立
つと強風をまともに受け、まばゆいほ
かりの展望である。直ちにやせ尾根の
鞍部まで下り風を立てて休憩。风がえ

なげれば、小春日和のよい天氣で天か
い雪の上に腰を下して鳳凰三山五峰の
さと、何とも云えぬ満足感が湧いてく
る。後から登って来た二人のパート
ミ三先に出してから出發、六方石附近
より右手にトラバース行跡に、雪の中
で深くえぐうねに踏跡がつけられてい
る。摩利支天と駒の鞍部に出る附直崖
岩石が露出し、アイゼンかカリくと
岩をかんで登りにくい。頂上は七宮が
見えてもう一息だ。今日は工さんと調
子が良くないようで遅れがちになると
最後の登りを、後ろからかけ声に押
し上げられて全員元気で雪で覆われた
頂上に立つ。石とお宮は雪がついてお
らず、迷路の寒氣を除けば、春山のよ
うにうんひりとしていた。展望は空一
つ早い完璧さだ。皆で、ほのか彼方ま
で歩きを指して、夫に登りし山、登ら
んどする山を示し合う。これは一人静
かに山頂に立、單独行とは又別り、合
司山行における山頂を楽しむ一つであ
あう。並光を受けて、下へ下りよ

岳タビーク、そこからちこちうに向つて進つてくら小太郎尾根、右手に深く切り込まれた野呂川の渓谷、それ注ぎ込むいくつもの沢、ぐんどの上に仙丈岳、更にそり奥はうか彼方まで目のといく限り高く雪嶺の山波に南アルプスの山々がある。当たりとさりて岩かげに入り昼食ととり女性よりナショコレートを衝突したありつく。全員で記念撮影として登路とそのまま下る。ベーストに着いた。今日は北岳のビーグルが夕陽に輝いていた。こゝまでの山行は天候にも恵まれ、特に技術練習も行なわれなかつたが、最良の十キロメートルの零雨氣合宿の一ヶ月、成果であったと思う。

昨夜、重い荷物に喘ぎながら北沢峠に到着したのが18時、すでに陽は落ちてしまつていた。峠附近は10㌢の積雪、暗うい中で寝守電燈の明り五時よりに降りしきる雪に手足をニゴえさせてや、どうしてテントを張り、どうしてテントを張り、石油コンロに火をつけ食事をすませた我々は、体と暖のためと胃袋の消毒のために、例によつて例の如くアルコールを服用し、とにかくんびりとしてしまつたのに、翌日目が覚めには十時直ぐになつてしまつた、テントの外に置いてあるバケンは10分もすると素晴らしい氷を製造してくれるので、オシガロツクとしゃれこんで調子のいい夜からしあがれたが原因と後悔したが斐にいたす。予程では駒ヶ岳に登ることなくございだが、時間的に無理なので、全員で仙丈岳に登ることにして、12時

行也紀連野岳丈仙營

にベースキャンプを出発する。駒ヶ岳の雪の少ないのに比し、仙丈岳の積雪は豊富でラッセルはしてあつたが、ところによつてはかなりもぐる所もあるが、雪がさうしており歩行は案外、松井兩氏は鞍沢通りルートのリ古と積雪することにして、山小屋に着くと休憩することにして、山小屋の端にとがつに頂き立つてゐる北岳が姿を見せ、小休止の時の目を樂しませてくれ、鳳凰から見立岳、周囲の岳側から見立岳、それから山の裏をかぶるが、私はこの仙丈に登る金剛山から見る北岳が一番好きしく思われる、小仙丈と過ぎ立つてから雪もしまり、アーベンがよく生き快適だ。塔高が讀く、この頃から、曇、ついに空から雪が落り出し、機縛ではけげしい吹雪となり、今度見えていた北岳もみる／＼うちに姿をかくしてしまふ。休息時のテルモスのミルクが冷えきつて体を暖めてくれる。

昨夜の荷上げがきつかつたせいか

篠原氏は疲労がほひしく、仙丈岳へ

の最後り登り下り我々も帰り五時

ツニドリして、雪穴をほり入り込む

、ベースキャンプを出発すること三

時用度、次第トクニまれた仙丈岳山

頂に立つことができた。考えてみると

、この仙丈岳が冬期に於ける初日

三十木闌の山である。同行の橋山

氏と固い握手。

休憩もそこそこに、急いで下山に向

かかって、小仙丈を過ぎてまもなく、

樹林帯に入り、雪上で道が教羽

の雷鳥を余見、そろ保護色の完全さ

で一目あうに感じさせられた。

樹林帯を半分すくすくして半ば

かり足でベースキャンプに戻り、戸

台より登つてくる江・鹿江両氏を出

迎え、例によくて冒険と消毒してえ

登隊の方二日目と終らせた。

（脚） 齋藤 緑井内氏の報告では牧

況レポートで雪が深く上部は雪

崩の危険があり不直當とのこと。

北沢合宿反省

35年正月合宿は、前年9月専合宿の

不実験が反省されて早期着手が打たれ

たが、毎度違う年度始まりに決定とせず

べき合宿地の選定が、装備・経験と脱

離合せねばならぬといふ事で大部

も下つてしまつた。前年度に比べると、計画に対する若干の積極的有効性

が見られたりは結構な事だが、それほ

反面会員標準の手薄さと物語ること

にもなるだろう。

技術面では当初目的としてラッセル

ワーク、アイゼンテクニック等の習得

も、時期一場所満足の結果を得られ

なかつたが、冬山技術講習会の伝達が

用具が一応用意されていたのだからう

回り合宿ではもとと前面に押し出され

て云長か、とはすである。

実践の面では、全般的に天候に恵ま

れて船人（男山同様のイーリング）が全頂

（仙丈・駒）の解説に終つてしまつたが、摩利又天季アタシクは登攀及び

時常用具不備といふことで放棄された
今の現状としては止むを得ないところ
である。

生活技術面では、装備・食料・炊事

・天幕・イカシード設営等に多くの収穫

があつた様に思われる。今回も差つか

り失敗も今後への貴重な捨石となるだ

ろう。

とにかく前年度と同様に入山期日がまち

まちであるため、合宿の統一性といふ

ことに問題を残した。正月合宿が単行

の行事登山的なものでけがく、あくまで

モアレヒニスムに立脚した合宿である

ならば、現在の様な合宿形態をそぞり

せず継続させる是否は、次回合宿まで

には決定云ふる必要がありては何か

ろうか。

（近藤四郎記）

山詣会の記録

▼九月八日(火)於事務所

一、市民ハイキングの件……本会にて
て才一候、補與武藏高原大野崎芝市
去連理事会に提出。

一、合周集中山行決定

(日) 九月二十日

(火) 谷川岳南面屬の集各次

▼又月十七日(木)於事務所

一、谷川岳南面集中

一、合周集中山行決定

(日) 九月二十日

(火) 谷川岳南面屬の集各次

▼又月十七日(木)於事務所

一、谷川岳南面集中

一、市民ハイキング

(金) 十一月十五日

一、奥武藏高原大野崎丸山

△本会参加役員 山県・齊藤・高井

血藤

一、県民体育大会

金昌 十月二七日～二十九日

△本会参加 長井・小林

▼十月八日(木)於事務所

一、冬山合宿計画案提出

一、谷川岳東面、谷川岳北面、日之出

一、根文峰、兩子北沢、富士山、中了

一、冬用天幕購入決定。56人用ウーバー(前後垂付)型

▼十月二十二日(木)於事務室

一、冬山合宿計画案案について討議

一、次々各氏が入会(準会員)されま

レバ。

(西川澄子(24)) 湘和市元町一の丘
一、山行報告

国民体育大会 江

一郎山 柏沼

谷川岳北面 山県

一、菅野氏御師館御祝品シール贈呈

△うもありがとうございましむ

菅野

一、市民ハイキング

▼十一月六日(金)於事務所

一、冬山合宿地決定：南アルプス北沢

一、冬山合宿役員決定

CL・吉田、ア・亞藤・山崎・墨江

企画・記録：齊藤・楠山

会計：山県

医療：柿沼・菅野・簡井

一、山行計画

金昌 十一月二十一～二十三日

△場所：秩父金峰山

△参加者：山県・柿沼・江・高井・直

一、菅野・小林

一、県岳連主催、冬山技術講習会

期五) 十二月四～六日

△場所：富士山 吉田大沢

△本会参加者：齊藤・楠山

一、冬山合宿下見山行報告

△うもありがとうございましむ

菅野

一、菅野氏御師館御祝品シール贈呈

△うもありがとうございましむ

菅野

果物、一二五〇、菓子一四〇。

装備費

三一、二〇、月

内訳 キャンドル(40本×6)

二四〇、石油四〇、石油缶(50×4)

二〇〇、鑑(50×2)一〇〇、餅肉

(10×2)二〇、たわし(30×4)一〇〇

小ぼうき、二〇、スコップ二〇、

アイスハケ(120×2)八〇、

穀城布

天幕斧管謝札、三九〇

雜費

計

会費へ繰込廿、三四〇、

会費へ繰込廿、

会費へ繰込廿、三四〇、

会費へ繰込廿、三四〇、

会費へ繰込廿、三四〇、

会費へ繰込廿、三四〇、

会費へ繰込廿、三四〇、

会費へ繰込廿、三四〇、

会費へ繰込廿、三四〇、

会費へ繰込廿、三四〇、

計

六九四二〇、円

五〇〇、

五百、

慶祝費(吉野、菅野)、一六二〇、月

山訪会茶菓子代、八二〇、月

計

五四四〇、月

八二〇、月

支

出

合

計

六七・八九・三四

一、差引残高 一五二・八四、年
(主)の借入金二〇〇、円の借入金があり
て実際上は三・四七・二月未だ
②現会員で三月までの会費未納分
46ヶ月分丸二〇〇、月。

会費は連帶負担、お納め
下さい。◆◆会計◆◆

編集



後記

さうすく、時期遅れにならないよう
会報に掲載しておきたいと思つており
ます。今後の会員、諸氏の協力をありた
めて要請する次第です。

◇ ◇ ◇

台風
日々の紅葉も間近さを思わせる
頃となりました。会員諸氏には、過

ぎ去る夏の山行を思い、装備を整

そとしつつ未だ秋の山行計画をあれ
これと譯つてゐることと思ひます。

◇ ◇ ◇

冬もすくやつて来ます。
そろそろ冬山合宿の候

補地について考えてい
る人もいることと思いま
すが、今から計画を

よく練って町年度にあ
ります。時々合宿

りませんか。
この頃しばしば新聞紙工等で雪難
報五目にします。天候の変り易い
二の喰、天候には充分すぎる程皆で努力
しようとあります。秋もやがては過ぎ去り、
け、基礎技術を身につける機会で努力
しようではありますへか。(HK)

毎度の貴会の会報御送附有難うございます
今後ともよろしく御指導下さい。

溪棱山岳会

各山岳会殿

溪棱才12号

発行日 昭和35年9月25日

発行所 埼玉県浦和市高砂町立、ハリオ
代表者 柳沼博

17月刊行の予定で、次回才12
号も編集チラシと原稿不足
のため夏を越してしまい、やゝ皆
様のお手元におどけすることが出来
ましまして、毎回の編集予
のなげきですが、編集チラシ最大の仕
事は原稿を集めることだと云うこと
を今最も身にしきて感じました。会
員諸氏の御賛美、多々、専、出来
の発展を期そうではあ



溪稜山岳会

埼玉県浦和市高砂町5-89